熊本大学学術リポジトリ

和歌 ： 文苑

著者	稼堂，渓川，學人，松露生，江楠生
雑誌名	龍南會雑誌
巻	３８
ページ	４６-４８
発行年	1895-06-30
URL	http://hdl.handle.net/2298/4610

す、といはんも、よのつねなり、

松風のはゝきにちりをはらはせてにほふみてらの花のしやくやく

海上月　　稼堂

つくしぢの雲はれわたるさゝらがた今かさすらんさゝらえをとこ

狩野季信の畫をフアーデル氏ととやろくさだしける

よしあしのこゝろはたなし難波江の西と東のかたかはるとも

新竹

生さきの恐るへきかなぬきいづる一夜見ぬまの窓のくれ竹

謠曲の夜打曾我

一筋のこゝろはなぞかたゆむべきちすぢの繩の身にかゝるとも

この頃、歌三つ咏みて、題名を、求めたれど、

得ねば其まゝにす　　溪川學人

あら熊の越ゆる小木曾の山中に我住みなんかたゞひとりして

を歌みたにせさりし夜への雨は晴れて有明の月に鴈なきわたる

大丈夫かきのふ狩りせし山のへにひとむら雲のたなひきにけり

社頭五月雨　　松露生

河の邊の若葉の杜に月影をいつか待こんさみたれのそら

夏山

さみたれの晴間の山の窓近こぬるゝは雲のすたくなりけり

歸休兵

草枕結ひしころもときすてゝ歸るやいかに嬉しころらん

樹蔭納涼　江楠生

風さよく奈良の木蔭に立寄れは夏をよそなる袖の涼しさ

水鷄

そことなく澤邊をくれは夕まくれまこも隱れにくひな鳴くなり

夏月

庭草のつゆに宿れる月見れは秋の夜いそくかけの冴けさ

寄夏祝

大君の惠みの露に夏草の茂りあひゆく御代にもあるかな

偶成

天津日の光かしこみ醜草のきのふにも似ぬ色そみえける

騎兵の曙ち歌

巴城生譯

茜さす　朝日のひかりに　わが生命　消え果つべきか　うちひゞく
ラッパの聲と　もろともに　我ら多くの　武夫は
世をぞ去るべき　いざ去らむ　はゐりしことも　何かせむ
昨日まで　誇れる駒に　むちうちて　明日は草葉の　つゆなれや
今日は矢玉に　胸うたれ
つくすたのしみ　つきせねど　花くれなゐに　そめなせる
うるはしき　消ゆべきぞ　はこるべきかは　さき匂ふ
姿もやがて　顏せも
なれがはこりの　調むなり　任せつゝ　いといさぎよき　うち死を
薔薇も一度は　いさましき　譽をのちに　傳えなむ
神のみむねに　ますらをよ
とげて騎兵の
たけく戰へ

論歌謠之德

秋月胤繼

人生而有性、有性而有情、情之接物而生也、爲喜、爲怒、爲哀、爲愉快、爲怨恨、爲思慕、爲無聊、